



むかし、むかし、和氣^{わけ}の里にたいそうと
んちのきく、三平という若者が住んでいま
した。三平は氣立てもやさしく、いつでも
子どもたちといっしょに遊んでやったりし
ました。

あるとき、三平は急に高い熱を出して寝込んでしまいました。

村の人たちが心配して集まり、となり村のお医者さんを呼んで、みてもらいましたが、どうしても熱がさがりません。

三日三晩わずらっただけで、三平はあの世へ旅立ったのです。





三平が三途の川にさしかかると、槍を持った鬼が番をしていました。「この橋をわたるにはわしの問題に答えるのじゃ。人間としていちばんたいせつなやりは何じゃ?」

三平は、鬼の持っている重そうな槍を見て答えを思いつきました。

「おもいやり（思いやり）です。」

「うむ、なかなかとんちのきく奴じゃ。渡つてよいぞ。」

三途の川をわたって、地獄の入口へくると、地獄の中が見えてきました。針の山や火の海で、たくさんの亡者が鬼に追われて 逃げまわっていました。

三平はとても心配になりました。今からえんま大王の裁きが始まるのです。

えんまさまは、この世でよい行ないをしたものは極楽へ、悪い行ないをしたものは地獄へ送るのです。





いよいよ、三平がえんま大王の前へ呼びだされました。

「おまえはどこから来たか？」

「はい、和氣から来ました。」

「三平、おまえは今までに人をだましたことはないか。しょうじきにもうせ。うそをついても、この鏡にきけば、すぐわかるのだぞ。」

三平は、小さいころ、となりのおばばをだましてお金をとったことを思い出しました。

「わたしはとなりのおばばをだまして、お金をとったことがあります。」

三平は正直に答えました。

「よし、おまえは正直ものだ。とくべつにゆるすぞ。おまえはぐらく行きじゃ。」

ほっとした三平はおそろおそろ顔をあげていました。

「大王さま、おねがいがございます。」

「ねがいごとがあるとうなんじゃ、どんなねがいかいいてみい。」

「ごくらく行きがきまったのに、まだどんなねがいがあるのかと、大王がげん顔をしていると」

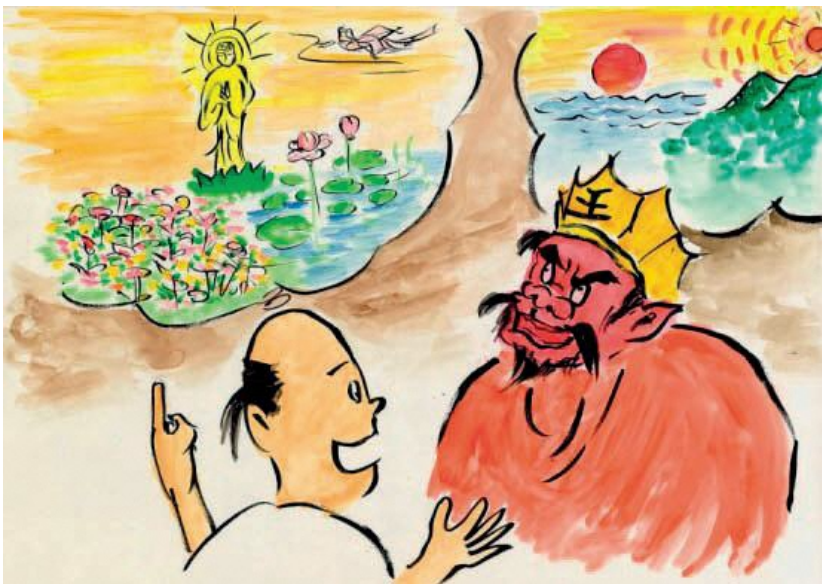
「大王さまのおしごとをいっぺん交代してただけませんか？わたしが大王さまの代わりにここでおさばきをしておりますから、大王さまはわたしの代わりにごくらくへ行き、どんなええところ見物して来てください。」

「うん、それはおもしろそうじゃ。」

三平は、大王がごくらくへ行けば、きつと居心地がよくてもどって来ないだろうと思ったのです。

「しかし、のう三平、このしごとはうくそうにみえてなかなかかむずかしいんだぞ。おまえにつとまるかどうかみきわめた上じゃ。次の問題がわかるかな？」

「朝日と夕日の どちらが重いか？こたえてみい。」





「夕日でございます。なにしろ日がくると海に沈んでしまいますから。」

「よし、正解じゃ。なかなか知恵のまわる奴じゃ。かわってやろう。」

こうして、えんま大王から冠と衣とさばき棒をかしてもらった三平は、えんま大王になりすまし、でっかいこえで聞きました。

「おまえはどこから来たのじゃ？」

「和氣から来ました。」

「そうか、和氣のもんか。この問題がとけたらぐくらく行きじゃ。雨の日に家のまわりをトント、トント」たいこをたたいてまわるものは何じゃ？」

「はい、それは雨だれです。」

和氣の人びとは、しゃばで三平とつきあってきたので、こんな問題は朝めしませす。

「よし、おまえはぐくらく行きじゃ。」

こうして、和氣から来たというと、すべいへ
らく行きになりました。

それをきいた鍋谷なべたにの人も寺畠てらはたけの人も、和氣
のもんだというようになりました。

それで、さすがの三平も、だれが和氣の人か
わけがわからなくなったということです。

今でも三平は地ごくで、おさばきをつづけて
いるのでしょうか。

みなさんも、えんまさまの前へ出たら『ワケ
のもん』と答えましょう。

絵・後 泰夫





むかしむかしのこっちや。石子村に、正造しょうぞうさんという、九谷焼の仕事をしている人がいたと。働きものの正造さんは、大きな皿や茶わんに絵をかいて売っていたと。その正造さんちの座敷の床の間に、たいそう大きな狸の置物がござってあった。七十センチ以上もある信楽焼しがらきやきの狸である。

正造さんちへ来た人は、でーんと置かれた狸をみると、

「うわあ、こりゃあ何と見事な狸じゃ。でっけえ腹をしとるのう。」

と、だれでもみんなびっくりにして、ほめちぎるのだった。

ある夏の晩のこと。正造さんちのうちに、
お参りをするようになった。

この日は、朝から、それはそれは、てんば
に暑い日やった。正造さんちでは、少しでも
涼しくお参りができるようにと、家族総出で
準備に精を出した。

特に、座敷は念を入れて掃除をした。縁側
の雨戸を全部開けて戸袋^{とぶくろ}にしまい、障子もは
ずして風が入るようにした。そして、床の間
をはじめ、座敷の隅から隅まできれいに掃除
をした。大事な置物の狸をぴかぴかに磨いた
のはもちろんのこと。





夕方になった。正造さんは、準備のできた広間に立って、し残しがないか確かめていた。すると庭の植え込みの木々から、涼しい風が吹いてきた。と同時に、縁側えんがわにつるしてある風鈴ふうりんが「リーン、リーン」と、鈴虫のような気持ちの良い音を響ひびかせた。

正造さんは

「これで、何とか暑さもしのげるわい。」
と、満足そうにつぶやいた。

夜になった。在所の人たちが、

「こんばんは。正造さん、めん（お参り）
にきたわ。ちよっくらおじゃまするぞ。」と
言って、つぎつぎと集まってきた。そうこう
するうちに、座敷いっぱい五十人くらい
のお参り衆になった。

やがて、美しい袈裟をかけたお坊さんが、
「おお、おめさんら、よう待とってくだ
さった。あんやと、あんやと。」

と言いながら、入ってこられた。そして、仏
壇に向かって手を合わせ、鐘をチン、チーン
と鳴らし、阿弥陀經あみだきょうを読み始めた。





お経が終わると、坊さんは、高座こうざに座って、静かにお説教を始めた。

「人はみんな遅かれ早かれ、いつか命が消えるのです。亡くなると、お浄土が待っていますが・・・」

と、ありがたいお話が続いた。お参り衆は、口々に

「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」

と、小声で唱えながら、お坊さんのお説教を熱心に聞いていた。

ところが、なんと、お坊さんのお説教の間、床の間の狸の置物がお参り衆を眺めていたのである。目玉をくるーり、くるーりと回しながら。

でも、お説教を熱心に聞いている人達はいひとり、そのことに気がつかなかった。





初めてのお説教が終わると、世話係の人がざるかごを持って、お賽銭さいせんを集めにまわり始めた。

その時である。床の間の狸の置物がかすかに揺れ動いた。ちょうど、床の間の掛け軸を眺めていた菊ばあさんが、その事に気がついた。

それで、隣りの源じいじに

「ねえ、あの狸の置物、本物そっくりじゃとおもわんか。」と、ささやくと

「おめえさんもそう思うか。わしも、つい今、気になったとこや。」と答えた。

二人は首をかしげながら、もう一度、置物の狸を眺めてみた。が、置物の狸に、これという変わった様子はなかった。

やがて次のお説教が始まった。お坊さんは、さつきと同じように南無阿弥陀仏を唱えながら、

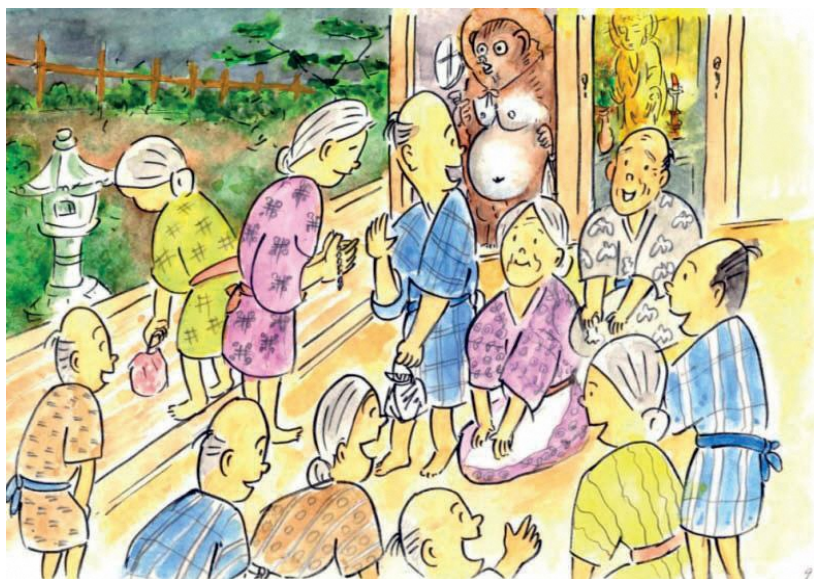
「^{みた}弥陀の仏さんを信じて、お念仏を唱えれば、必ずや極樂浄土へ生まれ変わることが出来る……。」

と、お話が続いた。お坊さんのありがたいお言葉に、お参り衆は手を合わせながら

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ……」と、お念仏を唱えた。

けれども、このお説教の間、あのお菊はあさんと源じいじの二人は、狸の置物が気になって仕方なかった。二人は時々ちらちらと床の間を眺めずにおれなかった。





お説教が終わると、お参り衆が席を立ち始めた。

「ええお説教やった。ありがたいこっちゃ。」

「ほうや、もやもやしていたものが消えて、胸がすつとしたわ。」

「今夜は結構なお話を聞かせてもらった。」

正造さんや、あんやと、あんやと。」

口々に話しながら、座敷から廊下へ出て帰りました。

お参り衆が、がやがや言いながら玄関へ向かっていた時、とんでもないことが起こったのである。何と、あの置物の狸から足が出てきたのである。続いてしっぽも。

そして、置物の狸は、しっぽをふりふり廊下を歩き出したかと思うと、縁からひらりと庭先へ飛び降りたのである。その姿を見た人が驚いて叫んだ。

「うわーっ、ありゃ置物の狸やねえけ。庭先をあるいとるぞ。狸が歩いとるぞ。」

その声にびっくりして、庭先を見た正造さんは、あつと驚いてしまった。帰りの支度をしていたお参り衆も、廊下に「わあっ」と集まってきた。

目をこらして庭先を見ると、庭の中に、身を隠すようにして、きよろきよろと周りの様子を見ている、狸がいるではないか。





「それっ、生け捕りにしてしまえ。逃がすな。」
とだれかが叫んだ。

その声に、正造さんの二人の息子が、あわてて棒
きれをもつて、狸を追いかけ始めた。

「おい、こっちへきたぞ。」

「あっち、あっちや。」

二人して追いかけるのだが、狸は思いのほか素早
く、あっちへ跳んだかと思うとこちらへ、という具
合で、見事に逃げ回るのである。その様子が何とも
おもしろいので、見ている人たちから、楽しげな笑
い声が始まるようになってきた。そうこうしている
うちに、狸は、人間様たちに、にっこり笑った顔を
向けて、どこかへ消えてしまった。

狸が消え去った後、縁先の地面を見ると、何と、床の間に大事に飾っていた置物の狸が、横倒しになっていたではないか。居合わせた人たちは

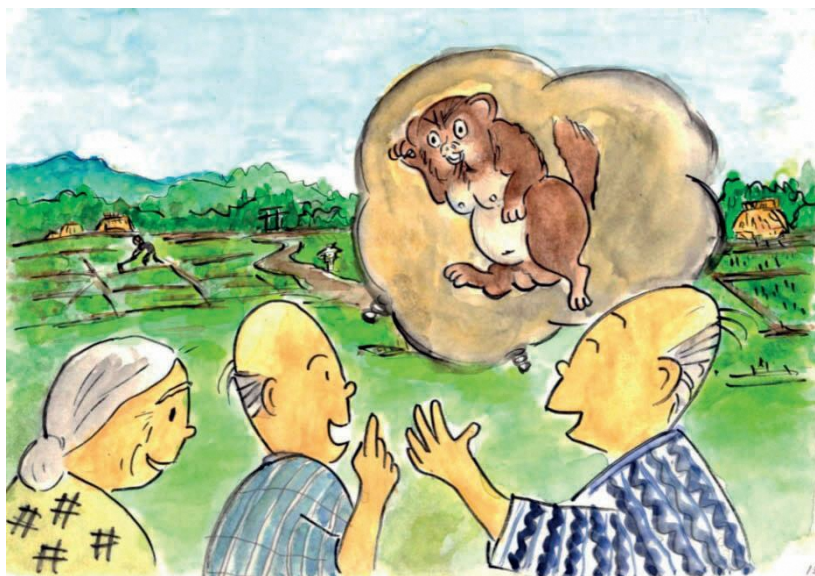
「これは、きっと、あの本物の狸の仕業に違いない。あいつめ、いたずら心が起きたんだろう。」

と、しゃべりあった。つまりこういうこと。

開けっ放しになった座敷を見て、忍び込んだ狸は、置物の狸を庭に捨てたのだ。

そして、自分が置物の代わりとなって、床の間に座り、人間といっしょにお坊さんの説教を聞いていたのだということ。





明くる日、初めてこのことを聞いた石子村の人たちは

「何と、肝っ玉のすわった狸がおったもんや。」

と、感心するやら、笑うやら。

ところで、その狸は、それからどこへいったものやら。

それっきり、二度と姿を見せなかったそう
な。

昔、狸が人里近くで住んでいた頃の石子村に
伝わるお話。

絵・後 泰夫